

Book Review 33-4 台湾の小説 #炒飯狙撃手

『#炒飯狙撃手』（張國立著）を読んでみた。著者は1955年生まれの中国の作家。日本語学科卒。数国語を話し、文学賞受賞多数。

台湾のスナイパーの話。台湾と欧州の都市（ローマ、ハンガリー、チェコ）で話が交互に展開するスケールの大きい陰謀が絡む物語。炒飯を作るのが得意なスナイパーというところがユニーク。

本書は実際にあった疑獄「ラファイエット事件」を下敷きにしている。事件は、台湾が1995年にフランスの軍需会社からラファイエット級フリゲート艦6隻を購入した際に起きた。この時台湾が払った代金はシンガポールの倍額だった（上乘せはリベート）。その上、搭載する武器一切を中国に渡し、別に20億ドルの武器購入予算を組んだという間抜けな事件であった。フランスも中国に黙認料として設計図一式56箱を贈呈した（中国はフランスから手に入れた設計図を利用して同じ艦を造って今も運用中）。この事件でフランス人を含む関係者10人以上が不審死を遂げている。不審死事件は迷宮入りし、処罰者は1人も出ていない。

主人公は二人。台湾の潜伏工作員Gはイタリアの小さな炒飯店を営んでいる。ある日命令を受け、ローマで標的の台湾人を射殺する。ところが、命令遂行後何者かに襲撃され、命を狙われる。一方、定年退職を12日後に控えた台湾警察刑事R（主人公、妻、息子の三人家族）は、台湾で発生した海軍士官と陸軍士官の連続不審死を追って、台湾を駆け巡る。その遺体に彫られた“家”という刺青が二つの事件に共通していた。背後に蠢く巨大な武器売買の陰謀があった。引退まで十二日という期限付きで物語に拍車を駆ける。SNSの利用も過去のスパイ小説にはない要素で、推理の枠を広げている。解決のため、イタリアへRの上司を送る。追っていたはずのスナイパーGが、逆に何者かに追われ、どんな結末になるかページを捲ることになる。

台湾のスリラー作家たちの作品が待ち遠しい。続編もあるようだ。